「杜に想ふ」（神社新報）　平成26年3月10日

武の道

山谷えり子

今年は、日本武道館開館五十周年にあたる。学生時代、私は合気道の演武会を見て、宇宙の和合の心を見るやうな思ひに打たれ、道場の門を叩いた。出産・育児でしばらく休んだものの、還暦をすぎた今も道場に通ふ日々をいただいてゐることに感謝してゐる。

開祖・植芝盛平翁は、熊野本宮大社や那智の滝からインスピレーションを受けて合気道を生み出されたので「神の心を行じてゆくのが道」「心を清めよ」などと語ってをられた。新渡戸稲造も『武士道』の中で、武士道の究極の理想は平和・和合の道であると記してゐる。

昨年の三月、平成三十二年のオリンピック開催地を選定するために東京を訪ねてゐた国際オリンピック委員会評価委員の一人に、宮本武蔵の『五輪書』の愛読者がいらしたことを後日聞いた。『五輪書』の中には〝正しく道を思ふ〟〝身を浅く思ひ、世を深く思ふ〟などの考へ方が示されてゐるが、その評価委員は下村博文文科相に、日本の文化に敬意をもってゐるとして、オリンピック憲章の心を日本からさらに崇高なものとして発信してほしいと語ったといふ。

さて、半世紀前の東京オリンピックで、柔道が正式種目となったのは昭和三十六年のことであった。当初は予算の関係上、代々木の屋内水泳場を、水泳の競技終了後にプールの上に板と畳を敷いて柔道会場とする計画であったといふ。しかし、国会議員がそれでいいのかと立ちあがり、超党派五百二十五人からなる「武道会館建設議員連盟」が作られ、武道館建設の決議が全会一致でなされたと聞いてゐる。当時の池田勇人首相、田中角栄蔵相、河野一郎建相の連携で、北の丸の地に建設が決まるまでのスピードは、今も関係者の間で語り継がれてゐる。

昭和三十八年十月には、昭和天皇から「御下賜金」を賜り、着工から昼夜兼行の工事一年足らずで、〝三保の松原から見た富士山〟をイメージする美しい武道館が完成し、昭和三十九年十月三日には天皇・皇后両陛下をお迎へして、政・官・財界、武道界、スポーツ界の代表が列席して、武道演武がなされたのであった。

といふ次第で、現在百十六人の国会議員で作る「武道議員連盟」の理事をしてゐる私も、先人への感謝と喜びいっぱいで今年の五十周年記念の日を迎へようと走り回ってゐる。

第一次安倍内閣の教育再生で、中学生の男女武道必修化が決まり、武道場の整備、指導者研修が進められ、平成二十四年から授業の実施がなされてゐる。柔道・剣道・弓道・相撲・空手道・合気道・少林寺拳法・なぎなた・銃剣道の武道九種の中から、地域特性などに応じて選択され、武道家に指導を仰いでの授業が進められてゐる。

文武両道は日本の心である。道を歩む心に触れながら、生きることの深さを感じてほしいと願ってゐる。

（参議院議員、神道政治連盟国会議員懇談会副幹事長）

杜に想ふ